+博論書式 3(論博書式 3)

平成 30 年 9 月 10 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　野	看護学分野
学籍番号		院生氏名	河野　朋美
通学キャンパス	福岡キャンパス		
論　文　題　目	知的障害者の医療機関受診における保護者支援のあり方の検討		
審査結果（枠で囲む）	合格	不合格	

＜審査結果の要旨＞

１．研究の概要

1)本研究の目的：知的障害者の医療機関受診に関する保護者のニーズと課題を明らかにし、受診に対する困難を緩和するための保護者への支援のあり方を検討することである。

研究の構成及び方法：本研究は 3 つの研究から構成されている。

研究 1：知的障害者の医療機関受診における保護者のニーズの実態と受診を困難と感じるプロセスを明らかにすることを目的に、知的障害の保護者 3 グループ 14 名を対象としたフォーカスグループインタビューによる質的研究で、修正版グラウンデッドセオリーにより分析した。

研究 2：研究 1 で生成された知的障害者の受診状況や保護者の医療機関受診に対する困難感、支援のニーズをもとに質問紙を作成し、全国の知的障害者保護者団体 54 か所の保護者 1,080 名を対象にした、自記式質問紙による量的研究である（回収率 34%）。

研究 3：研究 1 の結果を踏まえ、知的障害者の医療機関受診における支援対策の現状と課題を明らかにするために、市障害者計画について全国の 771 市の障害福祉担当者を対象に行った自記式質問紙による量的調査である（回収率 51.2%）。

結果：研究 1 では、23 概念、7 サブカテゴリー、2 カテゴリーが生成された。2 つのカテゴリーの【医療機関を訪れることへの気後れ】【保護者・医療機が・社会がそれぞれできる取り組み】は、前者が受診を困難に感じるプロセスで、〔スムーズな受診への不安とその緩和に対する負担〕〔医療機関での不快体験や失敗体験による受診負担の増加〕〔受診負担解決への無力感〕〔受診への自信喪失〕のサブカテゴリーからなる。後者は〔受診における成功体験への保護者の取り組み〕〔医療機関の理解と受け入れ体制の改善〕〔受療支援システムの改善〕からなり、受診困難感の改善に影響を与えると保護者は考えていた。研究 2 では、保護者の 75%に受診困難感があり、受診困難感の有無とその他の項目を χ^2 検定により分析した。受診困難感緩和のためには、知的障害者に対する受診支援プログラム、知的障害者の対応理解、保護者とのコミュニケーションなど、医療機関や自治体、社会からの支援を強く希望していた。研究 3 では、知的障害者に特化した計画が 12.2%と障害別では一番低く、約 4 割が医療支援対策は十分でないと認識していた。医療支援対策が十分であると回答している場合の主な理由は、医療費助成の実施であった。分析は医療支援対策の回答(大変十分から全く十分でないの 6 段階)と他の項目との χ^2 検定及び自由記述の質的内容分析を行った。

２）本研究の実施にあたっては、本学の倫理委員会の承認を得て実施されており、対象者の同意を得て適切な倫理的配慮がなされていた。論文の構成や文献の引用も適切であった。

３）本研究は知的障害者という集団に対する健康寿命の延伸、疾病リスク予防の視点から問題発掘をするもので、そのこと自体に独自性がある。今後の発展にも期待ができ、知的障害者の健康と保護者支援に貢献する研究として評価できる。

２．審査経過：7 月 23 日に第 1 回審査を行い、口頭試問においては適切に応答したが、３つの研究の論理的展開、研究の総合考察や図表の表記などの修正を求めた。8 月 16 日に修正論文が提出され、審査担当者で査読を行い、再度 3 つの研究の意味づけや関連、文書表現について改善を求めた。9 月 1 日に再提出され、審査担当者で査読を行い、ほぼ適切に修正が行われたと判断した。

３．口頭試問の結果：口頭試験においては、審査員の質問に対し誠実に応答した。

４．以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認め、本人のこれまでの努力と今後の研鑽を期待し合格とした。

論文審査担当者	主　査　　標　美奈子
	副　査　　杉原　素子
	副　査　　山下　留理子